

審査講評

高橋晶子

(第5回 高知県建築文化賞審査委員会 委員長)

前回に引き続き「高知の社会性、歴史性、文化性から見た地域環境への適合性」を主たる評価項目として審査に臨みました。3名の審査員が持ち点を適宜配分しながら投票、それをもとにメール協議にて絞り込みを行い、県民審査上位3作品を含む9作品の公開プレゼンテーションと現地確認を実施、最終審査会で受賞作を確定しました。

今回の応募作から透かし見えたことは、CLTなど木造の新たな試みと、再生・時間を紡ぐというテーマでした。いずれも高知オンリーというよりは全国区のキーワードですが、作品それぞれを見てゆくと、具体的な状況にどんな展望をもち計画・設計したかという「筋道」がありました。その筋道に、創造性や開拓精神を強く感じとれる作品を評価しました。

結果、今回は「あらたな高知」とでもいうような作品群が入賞したと感じます。以下、入賞作品のコメントです。

高知県知事賞「分割造替 金峯神社」：過疎が進む山間に打捨てられかけていた氏神神社の再建。里の拝殿と森の本殿に分割造替、自力で建設している。単管足場のフレーム、スキの垂木と厚板にポリカ波板という簡素きわまる仕様の社殿は驚きと同時に原初的な力強さにあふれ、特に旧社殿地に移すためキャスターが付いた本殿は何かが宿っている。いままでも、また、今後もあまり出会えない建築だと思う。里での霊祭の復活が喜ばしい。

優秀賞「すくも商銀」：主要構造部にCLTを用いた日本初の銀行。南北に抜ける無柱の大空間を片流れ屋根が覆うシンプルな構成で、県産の杉と桧が製材、集成材、CLTとして適所に使い分けられており、どっしりした耐力壁、軽やかに大空間に渡る床版、力強い小屋梁、しなやかに伸びるキャノピーと、豊かで多彩な木の要素が感じられる個性的な空間が実現した。3.5ヶ月という設計期間で成した完成度の高さにも驚いた。

木造文化賞「高知県森連会館」：高知県が全国に先駆け取り組むCLT建築、最初のプロジェクト。在来軸組工法にCLTを構面構造材として組合せ、さらに、燃焼実験を経て準耐火構造の認定を取得、被覆材として木の現しを実現した。CLT普及のためプロトタイプとなる建築が目指され、特にエントランスホールはどっしりした質感や厚みが表現されたショールームとなっている。

新人賞「相生町の家」：市街地に建つ小規模ビルの空きスペースを改修、周辺環境の密度感に合わせた余白豊かな空間に再生する試み。路面部には街に開く半屋外空間、内部は各階の開口を通じ立体的に見え隠れする場所の連なりが生まれている。シンプルな素材でまとめられた光が印象的な空間は住み手とよく合っている。

新人賞「大桶の家」：施主がまず、すばらしい。地元嶺北産の杉を使ったシングルウッドパネルSWPを自宅で初めて採用、全5回のセミナーで木材の生産、加工、建築工事の過程を

公開された。SWP は地元工場で作成可能で戸建や小規模木造建築に使い、地産地消と人材育成につながる。丁寧な設計によって実現した木のトンネル空間が心地よい。

県民審査賞「中久万の家」：2.7m角のグリッドを3列3段に配した正方形の平面輪郭に非対称の屋根とデッキバルコニーが特徴的な住宅。眺望の良い2階には大屋根の架構のもと家族の居場所が連なり、コンパクトながら多様な空間が内包されている。

審査講評

曾我部昌史

(第5回 高知県建築文化賞審査委員会)

9作品を現地審査対象としたが、それら9つの範囲でさえも、それぞれの個性に満ちた特徴的な提案がなされていて、そのレンジの広さが印象的だった。何かしらの課題に対して挑戦的なやり方で回答を得よう、というスタンスが共通しているようで、その結果として辿りついた方法が、それぞれの個性を引き出している。

高知県知事賞を受賞した金峯神社は、プロジェクトを成立させる諸条件が一筋縄ではない。立地、地域性、歴史などの諸文脈を解いていった結果として、施工方法なども含む特徴的なデザインの全体が得られている。特異な存在感は、建築物単体によるものではなく、そこに至るアプローチや森が引き寄せる雰囲気などと共にある。そのためか、単管などの素材を用いながらも安直な存在感には陥っていない。継続的な更新による持続可能性の提示にもなっており、過疎地での新たな建築への向き合い方としても位置づけられる。

CLT パネルを活用したプロジェクトが2つあったが、その試みは性格の異なるものだった。僅か数年の差ではあるが、CLT の活用方法が客観的に把握できるようになったタイミングで、適度な案配で CLT を取り入れた宿毛商銀が優秀賞を受賞することとなった。密度の高い設計作業の上に成り立っているもので、僅か数ヶ月の設計期間で実現されたことも驚きだった。スチールの張弦梁を組み合わせた CLT 床、CLT 扉の丁番まわりに生まれるスペースを活用した空調リターンなど、細やかな工夫は広範に及んでおり、それらを統合して生まれたデザインも気持ちのよいものであった。

CLT パネルを用いたもう一つの作品は、高知県森連会館である。高知県内における CLT 建築の先駆けといってもよい。森連会館という性格ともあいまって、CLT だから可能な事が徹底して取り入れられている。実現に向けた粘り強い工夫と CLT 活用促進に向けて果たした役割をおもうと、このプロジェクトの魅力はいや増すことになる。新たな木造建築のシンボリックな存在感を担ったものであり、木造文化賞を受賞するに相応しいと考えた。

地域の遊休不動産にどのような目を向けるのか。これからの建築を考える上での主題の一つである。相生町の家では、周辺の地域の様子にも目を向けながら、どこの街にでもありそうな建物をポジティブに更新するようにデザインされている。地域と接続する1階の半公共的な印象の場が、吹き抜けを介して天空に抜ける。それほど大きな操作が行われているわけではないが、この規模だから可能なことを淡々と実践した結果として、爽快な空間が得られている。

地域林業への強い意識をもったものも少なくなかった。大埴の家では、整った正方形平面をベースに、暮らしやすさへの細やかな配慮がなされている。明解な空間の分節は構造架構の合理性をも得ていて、SWP 活用を前提としたともすると木の印象が強くなりすぎそうな素材選定でありながら、鬱陶しさを生んでいない。木製建具の引き込み方や部材断面

寸法の選定方法など、細やかなディテールの取り扱いにも好感をもった。

新人賞を一点に絞り込むことができなかった。上述の相生町の家と大埴の家の2作品を対象とすることとなった。

現地審査日程は台風接近と重なっており、多くの作品を雨の中で拝見した。いつか、晴天時の建物の様子を体験できる機会を得られればと願っている。

審査講評

吉田 晋

(第5回 高知県建築文化賞審査委員会)

応募18作品から、3人の審査員による書類選考6作品に県民審査上位3作品を加えた計9作品を対象として、公開プレゼンテーションと現地確認を実施しました。私が今回、初めて審査員として関わり印象に残ったことは、説明者が20代から30代といった若い世代が多く、高知県内に建築設計の若い世代が台頭しつつある空気です。そのどれもが従来の「高知らしさ」とは違った表現を志向していたように思います。特に今回はCLTの活用について、高知の建築界でも近年の大きな課題であることが如実に出ていました。建築へのCLTの活用方法が洗練されていく過程が応募作品の中にも現れており、竣工年の違いをどう受け取るかなど、建築に対する見方や基準について改めて考えさせられました。

「分割造替金峯神社」は通常の建築プロジェクトでは、ほぼ誰も諦めるような場所に建っていた神社を鋭い歴史的な考察、独特な建設手法、素朴な素材、力強いデザインと浪漫主義的な想いによって再建を果たしています。なおかつ地域の人も参加する祭事も継続的に行われていると聞きました。これからの高知県の山間部の建築に対する考え方を拡大する作品であるとともに、ビジネスとしての建設業への批判も含まれていると感じました。

「すくも商銀」は現時点でのCLT建築の一つの到達点であるように思います。県内で竣工した各作品をよく研究し、短い設計期間でさらに洗練したものへと高めています。特に、空調システムや照明器具とCLTの取り合いは随所に新しい工夫がちりばめられており、これまでのCLT建築の課題が高度に解決されています。

「高知県森連会館」はCLT建築の初期の作品ですが、CLT建築のプロトタイプとしての役割を十分果たしています。それまでの構造はCLTであるものの「見えないCLT」建築から、被覆材としての「見えるCLT」建築の方向性を決定づけた歴史的な作品です。ホールのCLT表現は「すくも商銀」によく受け継がれており、CLT建築デザインの原型と言ってよいように思います。若い世代の清々しい表現であるが、プロポーザルで彼らを選んだ審査員の方々も評価されます。

「相生町の家」は改修プロジェクトです。既存の窓と慎重に開けられた開口部からの光のリバウンドによって各空間には微妙な空気のグラデーションが漂っています。余白の残す一体型の空間は洗練された軽快な表現と現在のシンプルな生活を巧く包み込んでいて、今後の様々な用途への可能性を感じさせています。

「大桶の家」は単に個人住宅であることを超えて施主の思いが設計過程とその作品に強く結実している作品です。各種セミナーの開催、地元の仕様であるSWPパネルの採用など広く社会に語りかけたい思いを強く感じます。また木のトンネル状の空間の落ち着きは、開口部の緻密なデザインとともに優しく繊細な木造住宅の表現の息吹を感じるものでした。